甲第9号証の1

都政新報

発行所　都政新報社
〒160-0023　東京都新宿区
西新宿7-23-1　TSビル
（総務・読者）03-5330-8781
（企画広告）03-5330-8784
（編　　集）03-5330-8786
（出　　版）03-5330-8788
（ファクス）03-5330-8808
購読料　月1,680円（税込）
毎週火・金曜日発行
ただし、祝日は休刊

©都政新報社2009

にりん草日記㉑

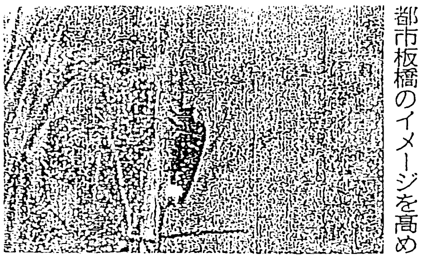
『石塚ノート』から

環境都市いたばし③

「ホタルの里」に広がる「緑のカーテン」

――板橋の環境を示すシンボルとしては「ホタル」と「緑のカーテン」もあります。

石塚　そのとおりだ。いずれも私の在職中に事業化され、全国的に知られるようになったものだが、環境都市板橋のイメージを高めた「ヒット商品」といえるのでは。まずホタルの飼育だが、1989年に福島県大熊町からゲンジボタルを、栃木県栗山村からヘイケボタルをそれぞれ卵で譲り受け、飼育を始めた。担当職員の努力の結果、順調に飼育がすすみ、93年に独立したホタル専用の施設を開設し、毎年6～7月の夜には多くの区民にホタルの乱舞を楽しんでもらっている。板橋の飼育方式は「生態飼育法」といって、水・植物・土などの連鎖を考え、ふるさとの小川などの自然に近い生育環境を作りだし、ホタルがカワニナやメダカなどと共生し、自らの力で世代交代をしながら生息しつづけているものだ。板橋も昔は水田などにホタルがたくさんいたが、開発の波で全く見られなくなった。板橋の「ホタル飼育」事業は、都会のなかで自然を呼び戻すという試みを通し、区民に自然との共生と癒しを実感してもらおうというねらいがある。



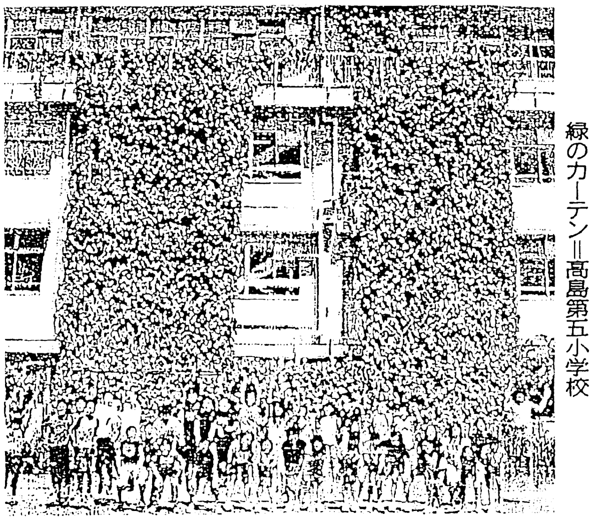
ゲンジホタル

――担当の職員[illegible]変研究熱心で、大学との共同研究に参加する中で、レベルの高い論文を発表し学位まで取得しました。つまり「ホタル博士」というわけですね。

石塚　阿部宣男という職員だが、たびたびマスコミにも紹介され、ホタルに関する執筆などをしている。若い頃は暴走族で鳴らし、役所に入ってもいささか個性的過ぎる職員だったようだが、子どもの頃から好きだったホタルの飼育の仕事に恵まれ、水を得た魚のように力を発揮した。私が「環境にいいことはなんでもする」という路線でエコポリス板橋をめざした時に、阿部という職員の存在が目にとまったわけだ。茨城大学に研究に行かせたのは思いがけない成功だった。04年10月に彼の『ホタルの光と人の感性について』という論文が日本感性工学会の賞を受賞した際には、職員褒章を贈った。なお、板橋のホタル飼育は特許を取得し区の知的財産権に登録されていて、区に使用料が入るようになっている。

――「緑のカーテン」は、その快適さを自ら体験した一人の小学校教諭が呼びかけ、学校の環境教育に導入したのが始まりですね。

石塚　03年に板橋第七小学校の菊本るり子先生（音楽）が総合学習の担当教師に働きかけ、地域や企業の協力も得て子どもたちに環境問題を体で学ばせようと始めたものだ。04年には、当時6年生の小林葵さんが学校での体験を書いた「地球にやさしい作文・活動報告コンテスト」の応募作で総理大臣賞を受賞した。作文は『板橋区環境読本』（07年3月発行）に掲載されているが、素直で明快な[illegible]現で緑のカーテンの効用を述べている。



緑のカーテン＝高島第五小学校

「……私は、緑のカーテンは『一石六鳥』のすぐれものだと思います。①地球にやさしい（クーラーは不要で環境を壊さない）②人間にもやさしい（クーラーより健康に良いし、見た目にも涼しく気分が和む）③植物や虫とのふれあいがある④水やり不要で雨水も利用できる⑤収穫物を食べる喜びがある⑥達成感が味わえるなど、いいことづくめです……」

――その後、区は学校、本庁舎をはじめ区施設に広げながら、商店や事業所、住宅にも導入を働きかけました。

石塚　区としては、コンテストやイベントの開催など普及活動を展開したが、この事業はやはり民間との協働がポイントで、板橋七小を発祥とする「緑のカーテン応援団」を中心とした熱心な活動があってこその全国区の事業だと思う。新聞の社説にも「単にエコ活動の一つではなく、住民参加型の地域づくりへの効用」が指摘されている。板橋発のエコ運動が日本、そして地球市民の未来を明るくすることを願っている。

（[illegible]）